

反応からリズムへの転換

前号では、動作の2回連続による反応動作の1回目と2回目の動きの連結について触れました。この連結の仕方がリズム能力の最も原始的な形になるということを述べたわけですが、今回は、この問題からリズム能力の本筋の話しに入ることになります。

前回述べたように、2回連続させる反応動作の動きは、基本的に単一の反応動作を単純に2回繰り返すことにはならず、1回目の動きそのものを変化させることによって「連結」が始まります。この動きの変化とは、2回目の反応をできるだけ速くするための時間短縮を優先させる変化です。ただし、「できるだけ速く2回反応する」という反応条件であることが前提となっています。これに、「正確かつ速く」という条件が加われば状況は異なりますが、このことは、もう少し先で触れることにしましょう。まずは「速く反応する」という条件内での解説です。

最初に、2回連続の反応動作の時間間隔に一定の条件を加えるとどうなるかという話しです。例えば、最初の1回目の反応から0.5秒後、1秒後の時間において2回目の反応を行うという条件ですが、やはり、この場合でも1回だけの単発の反応動作とは異なり、2回目の反応動作では動きの要素に変化が見られることとなります。2回目の動きまでに空けるべき一定の時間があるため単発の反応とまったく同じ動きが2回行うことになるかといえば、そうはなりません。どのような動きになるかという点、この2回目の動きまでの時間に合わせるような適応的な動作が生まれます。それは実に独特な動きです。

このことが意味するのは、1回目の動きから2回目の動きまでの時間条件、つまり「時間間隔を維持する」という条件そのものが反応刺激となっていることです。最初の何かの合図で素早く反応し、次の2回目の反応までの「時間間隔」に対して反応する…。言い換えると“合図と時間”という2つの刺激

に反応することになります。しかし、この2つの刺激は明らかに性質が異なります。最初の刺激は、音や光などの外からの刺激ですが、2つ目の刺激は自分自身が脳の中で作り上げる「時間間隔」という内からの刺激です。言い換えると、自分で「反応刺激」を作ることになります。

この2つ目の刺激、つまりどのくらいの時間間隔の刺激か、どのくらいのタイミングで2回目の反応を行うのかということは、既に反応前の準備段階から脳の中でイメージしています。そうすると、2つ目の刺激は、やがて外からの刺激に対する反応とは無関係に、独自につくられることとなります。例えば、合図なしで自発的に2度、3度と「反応」を繰り返す…。こうしてリズム運動が成り立つわけですから、合図がなくても自発的に動きが生じ、これに対して一定時間後に反応する、そして、2回、3回と動きを繰り返し、その直前の1回目、2回目の動きに対する反応を繰り返していくというふうに考えて下さい。ただし、このような反応の連続としてのリズム運動は、非常に「原初的なリズム運動」であるということになります。例えば、小さな子どものリズム運動は、まさにこのパターンから始まりますが、まずは原初的なリズム運動についてもう少し詳しく次回で説明することになります。

